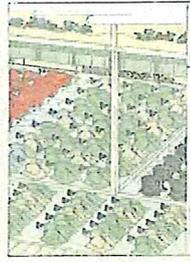


徳川治世 近代化の礎

270年続いた徳川時代は「パクス・トクガワナ(徳川の平和)」と呼ぶべき太平の世だった。歴史学者の山内昌之・東京大名普教授Ⅱ写真Ⅰが、大著『將軍の世紀』(上下、文芸春秋)を刊行し、こう評価する。徳川家康から慶喜まで15代の將軍の事跡を丹念に追いつながり、統一的な国家体制が整備されていく様子を描き、歴史から学ぶことの意義も示している。

(文化部 前田啓介)



江戸時代、大広間での儀式的の様子を描いた挿絵。諸大名が家格順に並んでいる(『徳川盛世紀』から。東京都立図書館蔵)

家康、人材登用巧み ■ 家綱、統治機構完成

山内昌之・東大名普教授が大著

専攻は中東・イスラーム地域研究と国際関係史だが、歴史学者の立場から、明治維新以降の日本の近代化や産業化を理解するための視点を提示する。「1600年の関ヶ原の戦いから見ていくべきだ。(明治以降の)近代化ではなく、(江戸期からの)近世化の問題と考えることが大事だ」。こう主張するのは、幕府の官僚制度が明治以降にもつながっていると考えられている。「明治以降の繁栄や平和の基礎は江戸時代にある」中でも、幕府を開いた家康を高く評価する。外国人や商人、僧侶など出自にとらわれず人材を登用したことを、「才能のある人間が登用され、珍重される。人材登用の基本だ」と語る。また、「織田信長や豊臣秀吉と違い、家康は自分が死ぬんでも、徳川家が瓦解しない統治システムの基礎を作った」と功績を認める。老中や若年寄らを介して統治する幕府の職制は、徳川氏が三河の一大名だった頃の支配機構を応用し変形させたもので、秀忠、家光へと

継承されて安定化していったからだ。

山内さんは人物評価の基準を、「統治者、政治家としての能力」の有無に置く。家康については「感情の起伏をコントロールでき、政治家として一番必要な安定

感があった。そうした理性に加え、負ける覚悟で武田信玄に挑んだ三方ヶ原の戦いを見れば、勇気や大胆さもあったことが分かる」と述べる。

また、これまで注目されてきたことが少なかった4代將軍家綱を「君臨すれども統治せずという君主の最高の形態だった。人柄も穏健で徳があり、家臣団にも酒井忠清ら有能な人物を数多く抱えていた」と高く評価。家康の手がけた統治システムは家綱で完成されたと思

る。

一方で、「パクス・トクガワナは功だけではなく、罪もある。あまりに豊かで平和すぎて、ヨーロッパ列強が迫っていることへの危機感がまるで欠如していた」と語り、11代將軍家斉について、ロシア船の来航への対応が十分ではなかったなどと批判する。

「ウクライナで戦争があり、日本人がこれまで持っていた安全保障観も変化しつつある。税収も増えず、少子化も進む。これらの問

題を踏まえ、国家としてのあり方を考えるとき、現在の日本を形作った江戸時代の最初にさかのぼって考えるべきではないか」

山内さんは『將軍の世紀』で歴史を通じ、「現代の問題まで読み解いているが、同時期に、吉田松陰の『留魂録』やイブニング・アッティクタカーの『アルファブリー』など古今東西の名著を中心に紹介した『歴史を知る読書』(PHP新書)も刊行した。

「何がしかの試練や情景に接したとき、似通った場面に遭遇した先人たちは、はたしてどのように振舞って問題を解決しようとしたのか。それを参照することは、とくに危機の時代を生きる私たちにとって、じつに意義深い作法であるのかもしれない」と記す。現代も困難な時代であることに変わりはないが、「自分たちの将来はどうなるのか、そういう近未来の姿を予想する際に歴史を教訓として学んでほしい」と語った。